

Title	杉田玄白をめぐる人々
Sub Title	Some persons around Genpaku Sugita (杉田玄白)
Author	松崎, 欣一 (Matsuzaki, Kinichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.50, No.記念号 (1980. 11) ,p.193- 221
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	国史 第五〇巻記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0197

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

杉田玄白をめぐる人々

松崎欣一

一 はじめに

杉田玄白が多才な教養人として詩歌にも長じていたことは、その日記「鶴齋日録」に記された漢詩、和歌、俳句など数多くの作品によって知ることができる。本稿はそれらの作品を通して杉田玄白をめぐるさまざまな人々についての点描を試みようとするものである。

「鶴齋日録」は、途中の二年分ほどを欠いているが、天明七（一七八七）年正月朔日に始まり文化二（一八〇四）年三月二十五日に至るまで書き継がれた、玄白五十五歳より七十三歳までの日々の記録である。その概要については前稿⁽¹⁾において報告したが、日記の全体を通じて日々折々に詠まれ書きとめられた作品の数は表1にみるように相当量にのぼる。漢詩一七八篇、和歌一一六首、俳句一八二句、その他四三篇である。但し、その他として一括した狂歌、川柳などの中には玄白自作ではなく、当時人口に膾炙したものを書きとめたのではないかと考えられるものも多少あり、作品数は暫定的なものとしておきたい。

ところで、「鶴齋日録」とは別に「鶴齋遺稿詩之二」及び「鶴齋遺稿歌之一」と題する写本が伝えられており、すでに大鳥蘭三郎氏によって翻刻及び研究がなされている。⁽²⁾その報告によれば、前者は天明七年十月十七日の冒頭の詩篇から文化元年九月六日の最終作品まで全一七二篇の漢詩を記録し、後者は文化三年九月より文化四年までの全四四三首の和歌が

表1 「鵜斎日録」にみる玄白の詩・歌等

	漢 詩	和 歌	俳 句	その他
天明7年	12+(1)	0	5	4
8	12+(3)+②	7	6	2
寛政元	29+(4)	0	9	3
2	12+(1)	4	4	6
3	10+①	0	5	3
4	12+(2)+④	8	4	9
5	2+⑦	1	1	2
7	2	20	12	1
8	1	1	13	1
9	4	11	8	0
10	7+(1)	3	12	5
11	3+(1)+①	23	5	1
12	3+③	7	14	1
享和元	7+(2)	8	16	2
2	8+(1)	10	16	0
3	11+(3)	4	22	0
文化元	16+(2)	6	26	2
2	5+(1)	3	4	1

注1. 寛政5年9月より寛政7年5月までの「鵜斎日録」を欠く。
 注2. 漢詩の作品数は「鵜斎日録」「鵜斎遺稿」共通のものを示し、さらに()・「鵜斎日録」にのみ見られるもの、□・「鵜斎遺稿」にのみ見られるものを加わえる。

る誤写、誤読などは考えにくく、とくに「鵜斎遺稿」としてまとめた際に推敲の手が入っているのではないかと思われる点もある。「鵜斎遺稿」の成立及び伝来の経緯が必ずしも明きらかではないので、ここでは「鵜斎日録」(以下、「日録」と略す)所載のかたちを基本とし、随時「鵜斎遺稿」を参照しながら考えていくこととしたい。

約一千篇ほどに及ぶ玄白の作品は、文学作品として必ずしも最高度のものとはいえないけれども、それらを一篇ずつみ

おさめられたものである。たまたま漢詩について「鵜斎日録」にほぼ重なるわけで、両者に共通する詩篇は一五六篇ある。また「鵜斎日録」にのみみられるもの二二篇、「鵜斎遺稿」にのみみられるもの一八篇の漢詩作品がある。共通する詩篇一五六のうちにも両者を比べると用字の相違のみ見られるものがあって、とくに「鵜斎日録」について、その原本の虫食いが甚しいために刊本にかなり多くみられる欠字部分や、刊本のミスプリントないしは原本の誤読かと思われる部分、また「鵜斎遺稿」テキストの誤写かと思われる部分などについてそれぞれ検討の手がかりが与えられる。しかしまた、同一詩篇の用字の相違について、単な

ること、あるいは年を追ってみていくことなどで玄白の周辺を考える貴重な手がかりを得ることができると思われる。今のところそれらを全体的に検討する余裕をもたないが、幸いにして玄白の作品には多くの場合に題目あるいは詞書があり、ここではそれらを主要な手がかりとして、どのような人々がどのようにそれらの作品に詠まれているかをまとめてみることによって、玄白周辺の人々と玄白自身の人となりとを幾分なりとも明きらかにしてみたいと思う。またそれぞれの人物について、名前だけは玄白の作品の中に残されたけれども、その実績あるいは具体的な人物像は必ずしも明きらかでないものが多数ある。人名をここに摘記しておくことによって今後の研究の資料としたいとも考えている。

二 玄白をめぐる人々

(一) 家族・親族

杉田家の家系については「杉田家略系並由緒書」及び「杉田家記」などによった諸先学の研究によってかなり詳しく判明している。³⁾今ここに玄白の周辺に限ってその一部を摘記してみると次の通りである。

まず両親及び兄弟については、父甫仙は医家としての杉田家第二代である。小浜藩医として享保二年に二十七歳で跡式相続ののち、明和六年九月十日に七十九歳で病歿するまで、酒井家五代（酒井忠音―忠存―忠用―忠興―忠貫）に仕え奥医師も勤めている。主として江戸詰であったが、小浜詰、また大坂城代に任じた忠用に從って大坂詰の期間もあった。母は蓬田玄孝の女と伝えられている。享保十八年九月十三日、玄白を江戸牛込の小浜藩邸内で難産のちそのまま世を去った。法名を伝えるのみで年令その他詳らかではない。玄白はこの母の末子であって、二兄一姉があった。長兄は元文六年玄白九歳の折に歿し、次兄仙右衛門は他家を継いだ。姉は嫁してのち宝暦三年玄白二十一歳の年に歿している。幼児を残されたためか父甫仙は後添いを迎え、玄白にとっては義母妹となる一女さえを得たが、この母も寛保三年玄白十一歳の時に亡くなっている。またさらに迎えられた義母も宝暦六年玄白二十四歳の時に歿している。

玄白は宝暦三年、二十一歳で藩主忠用に召出されたが、明和二年、三十三歳で奥医師に昇進した。同六年には父の跡を継いで藩主の侍医となった。安永二年夏五月、四十一歳にして妻を得た。安東登恵である。登恵は喜連川藩士の家に生まれ、幼くして両親を失ったので藩家老を勤める叔父生沼氏に養われた。江戸に生まれ江戸に育ったようであるが、十九歳の時から伊予国大洲藩々邸に藩主の母に仕えること十年に及んだのち玄白のもとに嫁したのである。一方この年の春正月には「解体約図」刊行のことがあった。「解体新書」刊行に先立つこの画期的な事業に表立って責任を明かにして尽力したのが信州の人であり、おそらくは玄白の最初の門人である有阪其馨（東溪⁴）、そしてのちの伊予松山医官安東其馨その人であった。相互の縁戚関係など事情はいま一つ詳かでないが玄白周辺の人間関係の一端をみることができ⁵。なお、「日録」には、天明七年二月一日に「生沼母義来」という記事があり、登恵の養家との交渉がしられる。

玄白と登恵の間には一男二女があった。長子（春了童子）は天明四年に夭折した。安永三年には長女扇が生まれている。扇と養嗣子伯元との間には三男二女があった。玄白にとっては、恭卿、白玄、露散童子（文化七年歿）、鶴、竹という五人の孫である。次女八曾はのちの宇田川玄真と結ばれたが年を経ずして離縁し万延元年に歿している。登恵は天明八年に病歿したが、玄白は後妻いよとの間にも一男三女を儲けている⁶。いよは吉田氏、宝暦十三年浅草に生まれ文政十三年八月十三日に病歿している。その子は立卿、藤、そめ、八百であり、立卿のもとには成卿及び玄端（のち白玄の養子）という孫を得ている。また田中氏に嫁した八百のもとには三男二女の孫（淳禎、遊、淳貞、淳良、烈）が生まれている。ところで、「日録」によれば玄白にはなお「道」という女子とそのままに生まれた一男一女の孫があった。文化八年に藩へ提出された「由緒書」や杉田玄端（弘化三年歿）によってまとめられた「杉田家記」になぜ記載されなかったのか、今後の検討の余地を残しているが、これまでの諸氏の研究でも言及されていない存在なので後に紹介をしておきたい。

表2はこれら玄白の係累についてまとめられたものである。晩年の玄白は自ら九幸と号して子孫の多きを幸いの一つとして数えあげたが、一方では近親者を次々に失い、とりわけ生まれながらにして母を知らず養母にも次々に死別し、また兄姉

表2 杉田玄白の家族・親族

		生年	歿年
玄白		○享保18. 9.13(1733)	—文化14. 4.17(1817)
甫仙	父	元禄 3	(1690)—明和 6. 9.10(1764)
某	母		—享保18. 9.13(1733)
某	継母		—寛保 3. 6.27(1743)
某	〃		—宝暦 6. 4. 4(1756)
某	長兄		—元文 6. 2.10(1741)
仙右エ門	次兄		
某	姉		—宝暦 3. 6.11(1753)
さえ	妹 (異母)		—寛政 8.11.29(1796)
登恵	妻	延享 3	(1746)—天明8 正.20(1788)
いよ	後妻		—天保元 8.13(1830)
某	長男 (登恵の子)		—天明4. 正11(1784)
扇	長女 (〃)	安永 3	(1744)—弘化 2. 6. 2(1845)
八曾	次女 (〃)		—万延元 7. 5(1860)
(伯元)	養嗣子, 扇の夫	宝暦13. 8. 7(1763)	—天保 4. 5.21(1833)
(玄真)	養子, 八曾の夫, のち離縁	明和 6	(1769)—天保 5.12. 4(1834)
(某)			—寛政10.10. 2(1798)
			天含童女, 酒井侯の女, 故あり入籍

△ 道	(?)	神戸氏に嫁す	
立 卿	(いよの子)	△甫太郎, 豫, 義兼, 甫仙, 錦腸, 寿泉院得 誉無彊築道居士	天明 6. 11. 15(1386)—弘化 2. 11. 2(1845)
藤	(")		○寛政元. 7. 18(1789)—
そ め	(")	信敬院妙浄日心法尼	○寛政 3. 6. 17(1791)—弘化元. 12. 17(1844)
八 百	(")	栄寿院松岩知貞大姉	△享和元. 5. 24(1801)—嘉永 6. 4. 6(1853)
恭 卿	(伯元の子)	靖, 松鶴, 蘭園, 鶴林院威徳松山居士	寛政 6 (1794)—文化11. 8. 14(1814)
白 玄	(")	玄, 梅庵, 梅園, 棋園, 棋園院	○享和 2. 6. 14(1802)—明治 7. 9. 19(1874)
栞	(")	露散童子	7. 11. 25(1810)
鶴	(")	鶴章院仙誉延寿妙等大姉	△寛政10. 12. 25(1798)—元治 2. 2. 6(1865)
竹	(")	円明院寂室自照大姉	○文化 2. 2. 3(1805)—天保10. 6. 22(1839)
成 卿	(立卿の子)	信, 梅里, 梅里院園誉秀香現奇居士	文化14. 11. 11(1817)—安政 6. 2. 19(1859)
△恰太郎	(道の子)		△享和 2. 正. 19(1802)—
△(女)	(")		△寛政10. 10. 4(1798)—

〈資料〉 本文注3. による, ○印「鶴斎日録」に記録のあるもの, △印「鶴斎日録」により補ったもの

とも早くに別れなければならなかった。そうした境涯に符合するかのように「日録」の中に、父甫仙、姉、妹さえ、妻登恵、養嗣子伯元、孫恭卿・白玄・鶴また前述の道のもとに生まれた二児についての作品が残されているのも興味深い事実である。以下、それらの作品及び伯父何佛にちなむ作品についてふれてみよう。

〈父〉

享和三年九月十四日、「日録」の記事は次のように記されている。

牛込御機嫌伺。父上牛込の山荘におはしける時、其起ふしを問ひ奉る路にいつも目當となしける日影ありけり。其高時はけふハ早かりしと喜給ひ、又低きときハ何とてしかりしと不興し給へり。其事思ひ出せハ四十年に近かるへし。今日其所を過て光陰の早ニ感す。

影法師のはやくも延し冬日かな

当年七十一歳の玄白の生活パターンは年来のそれを全く崩していない。行動半径こそやや狭ばまったようには思われるが、諸所の往診にあけくれ、病論会・軍会・歌会といった会合や菊見の宴への出席、また芝居見物などに相変らず多忙であった。そうしてこの九月はとりわけゆかりの人々を思い起す月でもあった。十日には亡父の、十三日には亡母のそれぞれの命日の墓参を例年のように欠かしていない。結局九月の一か月間で在宅の日は終日の雨天であった十五日の一日のみであった。さらにこの月は、十日に牛込の藩邸内に不幸があり、そのため玄白は三日と八日の両日に牛込へ出かけている。十四日の「御機嫌伺」というのもおそらくはこのことに関連することであると思われる。

こうして常にもまして思い出の人々を心に浮かべる機会が多かったというべきか、四十年の昔、牛込の藩下屋敷内に居住してあるいは病床にあった父甫仙を、日本橋近辺の居宅から訪れた日々を鮮やかに思い出したのである。明和四年十月、七十七歳の甫仙は老衰の故をもって上屋敷への五節句そのほか軽き吉凶の節の出仕を免ぜられており、その二年後に亡くなっている。⁽⁷⁾ おそらくはこの頃のことを伝えるエピソードなのであろう。甫仙の人となりについては、大槻玄沢による杉田家三代の略譜⁽⁸⁾の中に、信仰心の厚い質朴なそしてまた学に志した玄白の申し出に対して、「余汝がその言の出づるを待てり」として、西玄哲及び宮瀬龍門というしかるべき師につかじめた篤実な人物としての父親像が語られるが、ここに何気なく書きとめられたエピソードを通じてはむしろ前途有為な壮年の我が子に心を許した老父の我儘とでもいった心情が読みとれる。そしてまたそれを理解する年令に到達した玄白の心の動きと、そうした思い出に重ねあわせて、九月とはいえこの年は閏正月がありすでに冬の近い今日の「影法師」の長さに、確実に季節が移り時間が経過している事実をひ

しと感じとっている玄白の心情をみることができるように思う。

父甫仙については関連の作品がなお二篇ある。一篇は享和元年九月九日に三十三回忌追悼として残された。

二ツあまり三十一文字の年にあひてしたう涙ハやるかたそなし

とあるものである。他の一篇については次項でみることにしたい。

なお玄白の母は前記のように蓬田玄孝女と伝えられる。玄白誕生とともに死別して「日録」の中にはその姿をみることはないが、天明七年九月二十二日に、「墓参、蓬田へ見廻」、享和元年十月二十三日に「蓬田玄好母死」という二件の記事をみるができる。

△姉▽

姉については「日録」寛政九年七月二十八日に次のような記事がある。

寺は何所ともしらず、別傳長老立セ給へり。其所より如何して移り行けん、先々長安精舎の文室に至り、監察大和尚に参禅し侍れハ、傍に姉君おわしましけり。吹風いと寒く衣ほしと思へハ、父上の命蒙りて旅の空ニ出立用意に心いそかしく、手足達者に振舞へハ夢は覚たり。指折数れハ其人々ハ黄泉に帰して三十四の年を経ぬ。健なるも夢の夢にて百骸故のことし。

前月十一日に姉の墓参を済ませてから暫くして、玄白は夢の中に牛込の藩邸内にあった長安寺の方丈に参禅した自身の傍に、父甫仙の旅立ちをかいがいしく手伝う姉の姿を見たのである。おそらくは母親代りの役割りを担っていたであろう姉の姿をそのままに伝えるようなエピソードである。そうして誰を相手としたのであるうか、その夢物語がひとしきり話題となったのであろう。

見し夢の世語し長し種茄子

という一句で当日の記録は結ばれている。

△妹▽

さえは玄白にとって異母妹である。酒井家本の「後見草」の序文によれば玄白の著作の手伝いをしていたらしい様子がある。⁽⁹⁾寛政八年十一月の「日録」に、「廿九日、おさへ□□勝在宿、夕申刻不幸、今日より忌中引」、「卅日、おさへ送葬」という記事に続いて、十二月四日には寺詣りをしたことの記述のあとに、

残り居て鵝鴿啼や枯野原

という追悼句が書きとめられている。簡潔な記録の中にも、妻登恵をもすでに数年前に失っており、子、孫を除いては近親者をほとんど見送って残った玄白の感懐と過去の人々のへ追慕の念が読みとれるように思われる。

なお「日録」には天明七年六月十二日に「おさへ帰」、同年八月二十四日に「おさへ帰」、同八年三月二十七日に「夜おさへ来」、寛政元年七月十七日に「夜おさへ不勝」とあって、わずかながらその動静を伝えている。

△妻▽

妻登恵の亡くなったのは天明八年一月十九日であった。当日の記録は次のように残されている。

今夜六時頃帰宅□□如常家内一統食事候所、とえ事五つ時頃雪隠□□惡寒気分悪□□下女を呼、松と代参りて承連出つ、其由蘭知セ候故部屋より見候所、脉も閉はつといたし気分ニ成□□候間、褥へ連参り色々薬等用候得共、次第二痰咳強夜半頃少開口候所、又暁に至□甚百薬するしなく六ツ時頃落命、歳四十三歳也。

冷静な臨床医として、妻の病状の急変と死に至る経過を簡潔に書きとめた記録といつてよいだろう。しかし、「日録」の記述が全体に短いメモのつみ重ねのような記録であり、また「はつといたし」などという玄白自身の感情表現の語句の入ることは殆どないといつてよい中でこれはやはりやや異例な記事といえる。また「日録」の中には、多くの人々についての作品が残されているけれども、亡妻を偲ぶ漢詩二篇、和歌二首という数は他にくらべて多く、玄白の思いを自と語っていることなるう。以下、それらの記された当日の記事をそのままに適記してみよう。

(天明八年二月) 十三日 美日。直。

悼内作

噫吁汝是糟糠妻 事我□案與眉齊
 初来謹慎終不改 十有六年能雙栖
 何事一朝作沈痾 千百余日伏枕過
 可憐半死歛娛少 可憐一身憂苦多
 大姉少妹持几杖 相慰相助聊為養
 時对前庭看花開 纔出後園望月朗
 前庭後園風雨侵 忽歸夜台長蕭森
 匣中書草余手跡 牀頭針線思容音
 大姉解情吞聲哭 小妹覺眠誤探衾
 老夫对之兩難忍 哀々恋々淚不禁
 起向空房慨無事 強唱当日白頭吟

(寛政元年正月) 廿日 晴。牛込参。王子火。夜蔵前
 病用。

亡妻一周忌

空房□牌照青灯 語尽往事淚泫然
 女兒近来漸解事 学人今夜供清饌

(寛政十二年正月) 十九日 雨。墓参。

亡妻十三回忌懷旧

在し世に手馴し琴の糸の数

る歲月

(文化元年正月) 十九日 雨。本石町・丸内病用。墓
 参。

浄心院十七回手向

十年余り又七とせの今日までも
 おくれて残る花の身そうき

天明八年正月二十一日の「朝五ツ時頃より晴、四ツ時出棺葬送無滞濟、八半頃供人帰、夜より雨」といった記事に続いて、京都の大火の状況や相州筋の打ちこわしのニュースなどをはさみ玄白周辺の事態がきわめて客観的に記録されていく中で、同年二月十三日に記された長篇の漢詩は玄白の心情と、亡妻登恵が三年余りも病床にあったことなどを伝える貴重な史料ともなっている。十数年来、労苦を共にし慎み深かった人柄と必ずしも報われることの多くなく病床に着いて赴いた姿を思い、また後に残された幼い姉妹の何気ない立ち居振る舞いをみるにつけても、亡妻の占めていた位置の大きさを感じている玄白の姿をそのままに浮かびあがらせている長詩である。

それに続く詩篇には時日の経過につれて多くの人々を見送り、またそれらの人々の思い出の中に人生を達観して行く玄白の心の移り行きをみる事ができよう。

なお登恵の死を伝える「日録」天明八年一月十九日の記事の中にみえる「蘭」については、次の記事をもみることができ。寛政元年九月四日「蘭牛込参る」、享和三年三月十二日「今日蘭鉄槩付初并翁去年病氣全快祝」、文化元年五月七日「蘭霊岸島出」、同年八月二十三日「奥様御成、蘭御供」、同二年一月二十三日「御蘭下谷へ上ル」、同月二十八日「蘭下谷へ上ル」という六件である。玄白のかなり身近かであった人物であるが詳細については後考に待たねばならない。

前述のように玄白は後妻いよを得たが、「日録」の中には以下の記事がみられる。寛政七年六月十三日「いよ父死」、同八年九月十四日「いよ田舎へ行」、同月二十一日「いよ帰宅」、享和元年五月二十四日「いよ安産女子」、同三年四月四日「以代晝嶋発足」とある五件である。「女子出産」とあるのは「八百」のことであると思われる。

△子▽

養嗣子伯元については「日録」の寛政八年正月十三日に、「伯元とふへ落ければ⁽¹⁰⁾」という詞書きに続いて、世の中の穢泥にしはし染るとも

光は増ん新玉の春

杉田玄白をめぐる人々

と詠んだ歌がある。元日の夜と十日に降雪があり、この年は寒さも厳しかったようで連日のように「寒甚」という文字がみえる後で記されているものだが、歌の伝える情景はこのほか伸びやかなそしてユーモラスなもののように思える。それは病弱で夭折した長子に代って杉田家を継ぐべき者としての伯元への玄白の大きな期待が、玄白自身の周到な用意とも相まって着実に充されていくことが予期されていたこの頃の事情を伝えているようである。

すなわち天明二年に養子として杉田家に入ったのち、同四年に三人扶持を得、同七年に小石元俊にまた同八年には柴野栗山について修学し、寛政元年に玄白長女扇と結婚、同二年には大手詰并奥向病用勤務、同四年に内科兼任七人扶持というように伯元は着々とその地位を固めている。⁽¹¹⁾そしてまたこの頃、伯元を中心とした玄白の高弟たちの協力で、建部清庵と玄白とを結んだ往復書翰が「和蘭医事問答」として刊行されるべく計画が進行していた。伯元による同書の跋文に「近時、先生の業、隆んに世に行はれ、從遊の徒、笈を負ひて、日々に至る、先生輒ち示すにこの書を以てし、それをしてま⁽¹²⁾ずわが業の由って入る所を知らしむるなり」とあり、続いて「勤さきごろ、しばしば騰写を経るの舛訛を恐るるや、太子^(大槻玄沢)煥と謀り棗梨に上せて以て家塾に貯へ、門人騰写の勞を省かんことを冀ふ」とある。すなわち、当時蘭学入門者のよき手引きとなっていた玄白・清庵の往復書翰の出版に至る過程に、杉田塾と蘭学隆盛の気運のあったことを窺いみることできるわけで、同書の刊行がなったのも寛政七年のことだったのである。「日録」には伯元についての記事が玄白周辺の他のどの人にも増して多い。家学を継ぐべきものとして大槻玄沢とならんで玄白の期待の大きさをそこにみることができようと思う。

扇については「日録」には次の記事がある。寛政十年十二月二十五日「午初刻お扇安産女子出生」、享和二年六月十四日「□扇安産男子出生」、文化二年二月三日「扇安産夜丑刻過女子誕生」、同月九日「お扇七夜出生名お竹」とある三件である。いずれも玄白にとつては孫となる鶴、白玄と、竹という三人の子どもたちの誕生を伝える記事とともにその名を残している。また玄白の後添いであるいよのもとに生まれた立卿（甫太郎、甫仙）についても関連の詩歌こそ伝えられていない

が、以下にみるような多数の記録がある。天明七年八月二十五日「甫太郎誕生祝」、同八年七月二十三日「甫太郎不快」とある。同七年二月十九日「□太郎喰初」とあるのも甫太郎のことと思われる。寛政年間では二年正月二十三日「甫太郎痘□」、同年十一月二十三日「甫太郎祝、今日より甫仙改名」、四年六月二十一日「甫仙牛込一宿」とある。享和三年では三月十七日「甫仙願出即日済」、同十八日「甫仙発足」、同二十四日「甫仙便あり」、四月二十二日「甫仙着」とある。文化元年には三月三日「甫仙川崎行」、同五日「甫仙帰宅」、四月七日「観蔵甫仙参」、八月十三日「甫仙様採葉出立」、同二十一日「甫仙便あり」、十月十三日「甫仙帰着」、同十六日「甫仙修行扶持三人□被下」とある。詳細は不明であるけれども、採葉旅行などの動静の記録は貴重である。

△孫▽

玄白はその晩年に多くの孫たちに恵まれた。その中でも伯元のもとに生まれた孫のうち、長子靖（恭卿）、二男梅松（白玄）、長女鶴の三人及び道のもとに生まれた二人についての作品を残している。

まず寛政十一年正月元日はちようど立春にあたっていたが、前年の暮に生まれた孫のお七夜であり、伯元らに請われた玄白は名付親となって「鶴」と名を贈り歌を詠んだ。その折りの「日録」の記録は次のようである。

去年の冬産れし孫の七夜なりけれハ、翁に其名給へと父母の申給へハ、幼子とも膝下に集て如何に名けんと戯れけれハ、六ツと五の孫や子の、鶴とこそ申給へとあれハ、直々其言葉を取て名るとて

雛鳥のけふ立初る春の日に

呼かわしたる声の長閑き

歳旦

いつわれとけふを初音や雛の声

ここに書かれた六歳の孫というのは、おそらく「靖」のことであろう。玄白はこの初孫にも、享和元年正月二十一日、

杉田ま白をめぐる人々

たまたま玄白の藩医としての五十年の勤仕を祝う人々が集う中で、改めて「松鶴」という名を贈って、けふより八十年の松ニ宿りして

行末長く遊へ友鶴

という一首を残している。松鶴は寛政六年生まれである。今は欠けている「鵜斎日録五」の中にはこの嫡孫出生についての作品などが書きとめられていたように思われる。

享和二年六月二十二日、伯元二男の出生については「日録」に「伯元二男七夜名梅松発句」という詞書きがあつて、土用芽のことに繁れや梅と松

という一句が記されている。この年の春には玄白は流行の感冒を患い、一時は危篤状態に陥入りながら回復していた。そうして六月には盟友中川淳庵の追善年忌があり、また九月には自らの七十歳と良沢の八十歳を祝う合同の宴が開かれていたりするような合い間にあつて、次の世代への期待を広げながら好々爺ぶりを発揮している玄白の姿をみることができるところで、前述のようにその系譜上の位置についてなお検討の余地を残しているけれども、「日録」には以下のように

「道」の名がみえる。天明七年八月十五日「昼深川八幡へ道召連参詣」、同八年正月廿四日「お道本郷へ参」、寛政二年十一月十五日「道御殿へ上ル」、同三年七月十六日「昨日より道不快にて下ル」、同月十七日「道不快」、廿四日「道今日より宜」、同五年正月廿二日「道宿下り」、同七年九月十八日「道下ル」、同八年十二月卅日「お道忌御免」、同九年三月十五日「お道下ル」、同年四月廿三日「道牛込お供」、というように続いている。御殿へ上るとするのは藩邸へ出仕していることを示すものであろうか。忌とあるのは同年十一月廿九日に玄白の妹さえが歿していることと関連するもののようにである。さらに寛政十年十月四日には「道安産女子出生」とあり、つづいて十日には

道七夜出生二名を贈とて

十かへりの千年の数に契るてふ

二葉の松のすかたうれしき

と記されている。また享和二年正月十九日には「道安産男子五ツ半時」とあり、同じく廿五日には、

今年正月十九日外孫をもふけ侍りぬ。此春の歳旦に、

かとあけぬ御人あれや日の太郎

と云ふ発句し侍りたり。極て男子なるべしと意に占置しかはたして丈夫なる男子なりけり。翁に幼名つけよと父母の申こひ給ふにより、彼是と考ふるに怡文字ハ神戸氏の代々^くに伝へて怡日の音は近く左氏に怡然として理順ふと云ふことの侍れは、直ニ怡太郎と名参らすなり。行末、君につかへて逆事なく、理順ふ時ハ家業へ其身の幸ひかきりなく目出たかるへし。是そ翁か名乗らする意なりけり。生長の後も穴賢此事忘れ給ふへからず。

とある。いずれも老玄白が子・孫へ寄せる愛情を伝えているエピソードということができよう。また文化元年十一月廿二日には「昼御道方祝」という記事がある。なお神戸氏とは、寛政元年五月八日に「夜神戸周悦方病論会」とあるような記事をはじめとして、「日録」全巻にわたって病論会場を提供して前後十数回その名が見える人物、また寛政十年七月八日に「神戸休昌不幸」とある人物などに重なるものと思われ興味深い存在である。なおここに紹介した「道」の場合と類似の記録のされ方をしている人物がほかに数名ある。「おさる」、「おかな」、「お芳」、「おかよ」、「おかふ」などである。いずれも玄白宅に往来して玄白にかなり身近かな存在である。注記して後考に待ちたい。¹³⁾

△伯父▽

玄白には何佛という伯父がいた。杉田家系図のどこに位置するのかなど詳かにしないが、俳諧を嗜む人であった。「日録」寛政元年二月九日にその一周忌に因んで、

雨ふりて春の衣雫哉

という句を残している。また享和元年十一月十五日には、

杉田玄白をめぐる人々

余伯父何佛といへるハ、世にもてはやす俳諧と云ふものを好み、享保元文の頃、其道にたけたる人々ニ交り、是を学ひて生涯の樂となせり。其身罷りし後、遺物さまざまあり。其内ニ昔しめきたる東市隠、坐花酔月といへる二ツの石印あり。如何成物なる事をしらす。此頃、故山夕か点せし誹諧の紅仙といへるものを得て、其奥にもせしはケの二ツの章なり。夫と是と較へ見るに露たかへることなし。さあれハ彼人の所持の物なること疑いなし。伯父身まかりて年月を経ぬれば傳へし故ハしられず。余に在てハ長物ニして今の山夕師ニありてハ、伝道の衣鉢ニ似たるへし。因て贈り□候とて読る片歌、雪の山夕に残る枝折かな

という記事がある。何佛のもとより玄白に伝えられた二顆の印章が、たまたま玄白が別に得た書に押されたものに符合したことから、故山夕のものであることを知り当代の山夕にそれを贈ったという。叔父何佛と玄白との間にはかなり密接な交渉のあったであろうことが窺われる。また山夕についてはなお「日録」の享和元年三月十日に「山夕万句ニ遣す」とあって

今年より開き初也江戸の花

風の留守見てはやしけり土手の花

という二句が記録されており、山夕の主催する月並万句合に応じていることが知られる。また山夕は天保九年版の俳家大系図に貞門派の石田未得の門人としてその名を見ることのできる人物である。⁽¹⁴⁾ 何佛と交渉があったかと思われる前代の山夕については、「俳諧古選」に「行く水に口すすぎけり白樺」という一句が残されているという。⁽¹⁵⁾ 玄白の俳諧の系統を検討する手がかりになるかと思われる。

(二) 門人・知友

多くの門人、知友に恵まれ、また長寿を得た玄白はそれらの人々に因む多くの詩歌を残している。今かりその主な内容

によつてみると、①故人を偲ぶ追悼・追想のかたちで十六人、十七篇、②門人の帰郷などの機会に詠んだ送別賦が二十三人、三十篇、③友人・知己の長寿などを祝うもの八人、十四篇、④その他十七人、十九篇、⑤藩主及びその世子、そして数名の諸侯との関わりで詠まれたもの二十七篇となる。まず①について検討をしてみよう。

△桐生▽

「日録」の寛政四年三月十四日に二篇の漢詩が記録されている。去る八日に藤阪道恕宅に集まりのあった時の作品であるという。もっとも虫食いが甚しくそのうちの一篇は「哭桐生長」という初めの部分しか判読できないが、幸いにして「鶉斎遺稿」によつてそれが次のようなものであることが判る。⁽¹⁶⁾

哭桐生長生

人生雖有涯 死別故堪悲

曾多離旧友 又忽失新知

浮雲無定処 逝水轉閑思

何事余衰老 相着淚數垂

「長生」は「長逝」であろう。「桐生」は桐山正哲かと大鳥氏は推測されている。弘前藩医桐山氏は代々正哲を名乗っており「解体新書」翻訳グループの一人である桐山正哲永世の忌日は文化十二年七月十日である。また永世は桐山家四代で、前代の正哲忠英は明和七年五月七日に歿している⁽¹⁷⁾ので「桐生」は別人を考えなければならぬ。「又忽失新知」という第四句からは玄白によつて比較的新しい友人であったと解釈すべきであろうか。

△梅田氏▽

「日録」の寛政七年十一月卅日に、

三めぐりて手向摘や冬の草

杉田玄白をめぐる人々

という追悼句が残されている。「梅田故大八三回忌被招」という詞書きのあとに続くものである。「日録」にはこの他に小浜藩士かと思われる梅田氏の名がいくつかみられる。後述の天明八年の記事のほか、寛政元年三月十九日「若州へ当夏御供の人□被仰付、梅田平八御次被仰付」、同二年八月廿五日「梅田半平八百姫様御付被仰付」、同九年正月十三日「梅田彦蔵妻不幸」、享和三年四月十五日「梅田老母六十賀参ル」とあるものである。追悼句の対象者がこれらの人々の同族であると断定できないが、とくに天明八年十一月廿三日に玄白が米寿の祝いに出かけ、升尽しのつらねを贈ったその人は同一人物である可能性が強いと思われる。やや長文であるがその寿詞を次に引用したい。

一昨日梅田氏八十八寿宴、升に米蔓頭入を贈る。升尽しのつらねを添たり。抑く年賀の御祝、四十のとしを初とし、十としくいはふのは、唐も大和も同事。又六十一の年、本卦がへりをいはふのは、産れ出たる心地にて、童部にかへる意とや。扱又八十八の年、よねの祝を催を升掛とも申なり。米は五穀の長にして、上は天皇下万民、命をつなぐ宝ゆへ、此□の文□にあたればとて祝ひ申はことわり也。上から読ても八十八、下から読ても八十八、中より読は十八のおよねにかへる御袋様、わかやき給ふ御祝ひ、孫は子□まけ□□□今日御出の御客連、上戸は吞ます、下戸は喰ます、若い御衆は躁きます、御女中□笑ます、躍りもします、唄ます、益く尽ぬ御目出たさ、寸志斗りに候へども、御祝ひ申上ますで御ざりますてくるとホー敬て申上ます。

△福井氏▽

寛政十年三月三日、「日録」の記事は次のようである。

晴美日。牛込診。福井氏の房ハ予幼時住居しあたりなり。今日罷りしに昔しの人々ハ皆黄泉に帰し、せんすいのさまもかわり垣根ニ生ひし杉の木立の雲間にも届きぬるよふ見へ侍るなど見る付ても様々の事思ひ出て

あさましの老をや笑ふ山屋敷

玄白は牛込の小浜藩下屋敷内に生まれた。父甫仙が小浜詰となった八歳から十三歳までの間を除いて幼少年期にはその

酒井屋敷内に居住していたわけである。福井氏とは、「日録」の寛政二年十一月廿八日の記事に、「今日福井□助殿被召出、御蔵米二百俵ニ候、御寄合医被仰付」、また同三年二月五日に、「過福井□助君」とある人物かと思われる。同じ屋敷内に居住していた同僚ということになる。寛政十年、玄白は六十六歳であった。この年の正月十七日及び二月十一日に「牛込診」という記録があるが、三月にはこの日をはじめとして、十四日「牛込御用」、十七日「牛込宿」、十八日「牛込より引」、十九日「昼より牛込へ出」、廿日「牛込より引」、廿二日「牛込出」、廿三日「夕牛込より引」、廿五日「牛込出、眼病故引」、廿七日「牛込診」、廿九日「牛込詰」とあって頻繁に藩邸に往来していた。同月廿八日に「温姫様御卒去、三日鳴物停止」とあることに関連するものである。もっとも、藩医としてのこうした勤めの合い間にも諸所に患家を訪ね、また五日「夜川村諧」^(俳諧カ)、八日「墨水行、花已過」、十八日「夕百川宴」、廿八日「羅漢亀戸舟行」といった記録を残す日常の中にほぼ半世紀の時日の経過を回想し前記のような一句を詠んだのである。

△藤川良節・佐々木担蔵・樋口道泉・目黒道琢▽

寛政十年九月十四日の「日録」の記事は次のようである。

十四日、晴。近所・本町・下谷病用。

故友陸続上鬼簿有感

得寿長愁一病夫 近来何事意殊孤

世間風俗年々変 多少親朋次第無

夜若殿様御会読、藤川良節・佐々木担蔵・樋口道泉・目黒道琢近来病逝。

患家訪問と藩邸での勉強会といった年来の日常生活の中に相次いで先立った旧友を偲び残された我が身を複雑な思いで見つめた玄白の心情が詠まれている。

良節については天明七年正月四日「良節来飲」、同月廿五日「良節来」、二月十二日「良節来」、九月廿三日「藤川良節母

不幸、天明八年三月「藤川来飲」といった記事が「日録」にみられる。また寛政十年四月十四日に「藤川良節死」とあってその忌日が伝えられている。

樋口道泉は産科を得意とした医者であったことが知られているが、また江戸定府の弘前藩医であり、寛政九年十二月、上原元永、桐山正哲とともに医学師範を命ぜられ、江戸屋敷内の弘道館において上原の素問、桐山の本草綱目と並んで尚論篇を講じている学医であった。⁽¹⁹⁾「日録」では、寛政元年閏六月十八日に「晴且雷雨。採藥。直。道泉来話」、同二年十一月十四日に「昼御前へ召。夕越前様道泉宅参」という記事がみられる。また享和二年になった玄白半生の医学研鑽の成果を集体成した「形影夜話」の中にも道泉の名がみられる。臨床医たるものは、同一の医薬の効能が土地の寒暖・気候の違いによって同じにはあらわれないことに留意する必要があると論じた件り⁽²⁰⁾でその具体的事例を玄白宅に集った諸藩医たちの医話に求めているが、その中に松前藩医米田元丹、玄白門人で日向高鍋藩医福崎大順・萩原立章とならんで樋口道泉の名が記されている。寛政元年閏六月十八日の「来話」というのもあるいはこういった話題であったかと推測される。

目黒道琢については、「日録」の天明七年正月十六日、同八年十一月八日、寛政元年閏六月八日、同二年十二月八日、同三年九月十五日にいずれも道琢方で病論会あるいはそれらしい会合のもたれた記録が残されている。また寛政十年九月四日には「此頃目黒道琢死」という記事があるが、多紀元簡による「飯溪目黒先生碑銘」⁽²¹⁾によれば八月晦日に七十五歳で病歿していることが知られる。さらに同碑銘によれば、諱は尚忠、字は恕公また道琢、飯溪と号し、奥州会津の人であった。二十歳にして江戸に出て典薬頭今大路西岡に師事し医術を修得した。はじめ大番頭青山氏に従ったがまもなく辞去し諸方に遊学して医術を究めた。施療をもとめる者が日ましに増え、のちに松平定信に仕えたが寛政三年に致仕、同年に多紀藍溪の推挙によって医学館の教授となり医経を講じた。寛政十年六月一日には將軍に拝謁している。⁽²²⁾素靈、難経、傷寒、金匱などの医学書の註解の仕事がある。また「古今墨蹟鑒定便覧・画家書家医家之部」⁽²³⁾(弘化五年刊)にも「会津ノ人医学ニ精シクシテ既ニ大府医学館ノ助教ニ命ゼラル」という簡単な紹介とともに道琢の名を見ることができ。

佐々木担蔵については「日録」にも他に記事をみることができず詳細は不明である。

△山崎氏▽

「日録」には小浜藩士山崎氏に関する記事が十四件ほどみられる。天明七年正月廿七日「十蔵来宿」、同月廿八日「山崎母儀六阿弥陀参り」、同年三月九日「昨日十蔵差扣被仰付」、同月十三日「十蔵□免」、同年八月廿五日「甫太良誕生祝、山崎母儀来」、同月廿六日「山崎母儀帰」、同年十一月四日「山崎母儀来」、天明八年正月廿日「おさる、山崎母、十蔵宿」、寛政元年正月十五日「山崎出生、竹松と名付」、同四年十二月十六日「伯元被召出七人扶持被下本道兼帯被仰付、山崎十蔵御徒頭転役」、同九年八月十九日「夜山崎宴」、同年十二月廿四日「山崎母義不幸、夜山崎参ル」、同十年八月廿八日「山崎登再婚、夜山崎参ル」というものである。とくに十蔵とその母と思われる人物の玄白自宅の訪問、とりわけ玄白の孫甫太郎（立卿）の誕生祝の日や玄白の妻とえの病歿の翌日の宿泊などは山崎氏と玄白とのかなり緊密な間がらを窺わしめる。こうした関係からであろう。寛政十年十一月廿三日には「雪。在宿。夜山崎氏の佛事に罷て」とあって

けふの雪つもる咄を手向哉

という追悼句が書きとめられている。

△平賀源内▽

「日録」の中に源内の名がみえる唯一の事例が寛政十二年一月十四日条である。虫食いが甚しく判読できない部分が多いが次の通りである。

曇□寒。蔵前・本所・深川病用。□を迎へて門人大□新玉を祝し□^(多紀カ)を過ぎ故の□法眼の旧□を経□法眼世におハ□見の宴に招れ侍りし□横川渡り□君を初め□平賀源内□時の□者寄集り歌ひ舞献酬時を移し侍り故主人の饗応数尽せし内に□りと罵り合しも指を屈すれハ三十四の年月を経其坐の人々ハ□黄泉の客となり生残たるもの一人もなくかの法眼の棲給へる家だに移り替り感慨いと余りあり。昔名和伯耆守長年といへる人馬に打跨り大

路を過ぎ侍りしかハ□□天皇の御供せし人ハ尽く死に果しに長年一人生残りりと京童のものわらひニ腹立て其日の戦に打死せりとなり。彼是思ひ合すれハ心に恥る所ありて、

苦行して喰残されし□□^(草薨)かな

文意がやや取りにくい名和長年の故事に重ね合わせて、門人たちに囲まれた新年の宴の中にかつて壮年の折りに親しんだ源内を初めとする多くの人々を思い起しているものである。

△篠崎三伯・村山仲忍▽

寛政十二年十一月九日の「日録」は次のように記されている。

九日 大雨。今年村山篠崎両君を失ひて、

打連て立ニしあとの淋しさに

友なく千鳥独鳴也

千花源会。近所病用。

なおさかのぼって七日には「同^(晴)。丸内・下谷病用。篠崎君送葬。」とあり、さらに八日には「疎雨。吉原病用。篠崎君墓ニ詣ル。」とあって、

手向せし水より凍る涙かな

という追悼句が書きとめられている。また四月五日に「村山君遠行」、九月二日に「篠崎君遠行」とあってそれぞれの忌日を伝えている。「日録」の中で玄白は知人の命日を多くの場合、「誰某死」あるいは「誰某不幸」というかたちで記しており「遠行」という他に例をみない表現は注目してよいように思う。

篠崎三伯(朴庵)は小児科にすぐれた幕府の医官であった。また村山仲忍(勗齋)も同じく幕府の医官の家に生れたが、学を久保盞齋に受け更に武技百般を学んでのちに一橋家の御用人に進んだ⁽²⁴⁾。またともに柴野栗山との交渉も深かった

人物である。⁽²⁵⁾ 天明七年の篠崎宅における二回、村山宅における四回の「講釈」への玄白の参加はおそらく病論会などに類する学問研鑽の場であったと思われる。

しかし玄白と両者との密接な結びつきは、むしろ歌の道を通じたものが中心であったようである。「日録」全巻にわたって「歌会」ないし「和歌会」と明記された会合へ玄白が出席した事例が文化二年の村田春海方での三回を除くと、寛政七年・五回、同八年・一回、同九年・二回、同十一年・六回あって、いずれも篠崎あるいは村山方で行われたものなのである。そこで詠まれた作品も「日録」に多数記録されているが、一方では天明七年正月廿八日「夜村山振舞」、同年八月廿八日「篠崎夜饗」、天明八年十月廿三日「夜篠崎宴」、といった饗応・会合の記録も相当数残る。また天明八年九月四日、寛政元年八月十一日、同九年七月廿五日、同十一年十一月十日などにみられる篠崎方での「子待」またあるいは天明七年正月十一日や寛政三年正月六日の篠崎方での「福引」といった行事もあった。柴野栗山の撰した墓碑銘に「翼、人を閲ること衆し矣。未だ嘗て虚心無我なること君の如き者を見ず。吉人と謂ふべし」という玄白の言が引かれている⁽²⁷⁾事情を理解しうる記事の数々である。

△中川淳庵▽

水無月ニのこる氷の手向かな

「日録」の享和二年六月六日に「故中川淳庵追善年忌ニ」とあって記されているものである。この日、藤阪道恕方で軍談の会がもたれている。その折りの話題からであろうか、「道三君松永弾正へ被贈し歌のよし、長命ハ粗食正直ひニだらり折くお庇可被成候」とあり、また「澤山和尚歌に、楽は後□前に酒氣の合し友すり鉢の音」と記された後に続いて書きとめられている。道恕宅では三日にも源氏会がもたれている。この間、従前よりはるかに少くなっているけれども四日には飯田町・下谷・近所そして五日には本所方面の病用外出があり、また四日に「鳥居小弥太急病死」、五日に「寿筵、松田氏小浜発足」といったニュースが書きとめられ、また七日には「人身の養ふ道を思へ只水無月かけに残る氷を」という歌

が記されている。

前出の追悼句をどのように読むべきであろうか。淳庵は天明六年六月七日に歿している。⁽²⁸⁾ 小浜藩医として有能な同僚であり、あの「解体新書」の翻訳・出版にともに力を合わせた玄白にとっては心に残る人物であったはずである。「日録」の天明八年六月六日ではただ「淳庵三回忌」とあるのみであるが、十七回忌のこの日、懐旧の情は一入であったと思われる。四十八歳で逝った淳庵に比してはるかに長命を得た自身は人生を達観し悠々と日々を送っているわけであるが、一人残された懐いもまた日々につのる。水無月の氷という得がたく珍しいものを手向け亡き人を思うという。あるいは仮構であるかもしれない。また氷の朔日なる宮中行事あるいはそれにもとずいた民間習俗⁽²⁹⁾をふまえたものか。しかしまたこの氷とは思いがけずも長寿を得て残った自身を意味するようにも思われる。この日前後のそれぞれの記事は個々別々のものではあるが、こうした玄白の懐いをこめた作品を生むべく相互につながりを持っているように思われるのである。

△山本未白▽

未白君□後読る

中々ニ薬師の身こそかなしけり

君かなこりをかねて知るれば

(享和二年十二月十九日)

山本未白翁□□悼

風をいたみ残りて鳴や友千鳥

又

ふけどく埋火を消す涙かな

(享和二年十二月廿日)

道恕亭未白追福会悼句

廻り来て御近く鳴や友千鳥

(享和三年十二月十六日)

山本未白の名は寛政十一年八月十八日に初めてあらわれる。「未白出源氏会」とあるものである。「日録」にみる限り玄白・未白の交渉の期間は長いものではないが、ここにも追悼句は両者の親密な間柄を窺わしめる。同年十月廿九日、翌十二年に入って二月廿八日、五月三日、九月十八日、十二月三日いずれも未白亭での「源氏会」「源氏講」への出席がある。源氏会とはどのようなものなのか詳らかではない。高浜氏は源氏物語の講義³⁰、岡本氏は源氏節の会といわれている³¹が確証はないように思われる。また源氏会なるものへの出席がこの年(年間七回)に始まって、寛政十二年に廿一回、享和元年に十四回、同二年に三回、同三年に五回、文化元年に十一回とかなりな頻度で連続するようになっていた。また山本未白の名は玄白の参加したさまざまな会合の中で「源氏会」と「軍書会」のみにみえ、他の「病論会」「歌会」「俳会」などの場合にはあらわれないということも注目してよい事実であろう。享和元年三月八日の「日録」の記事は次のようである。

八日 同(曇)。月池病用。未白亭花見。

一日遊佳境一日之神仙とあれハ

仙人の仲間入して花見かな

盛りなる花の木陰にまといして

雪と降とも宿ハからなん

杉田玄白をめぐる人々

春風得意馬蹄疾 一日看盡長安花

此意由来誰得解 想像風流主人家

夕少雷雨。

さらに続いて同年八月七日と十月廿九日には未白亭での軍談の会、十月廿一日と享和二年二月三日に源氏の会そして以下にさきの追悼句が記録されているのである。未白について他に知られるところがなく人物像が明瞭でないが興味深い存在である。

△秋香院▽

「日録」の文化元年十月廿一日に次のような長歌及びその反歌が記されている。秋香院については他に知られるところがない。玄白によって長歌の詠まれたことも珍しくとりあえず全文を紹介しておきたい。

秋香院のはての日にそのおくつきにまうて来て懐□を述る長歌

信説

くれないの塵の浮世を白糸のいとひてなとや長月の千年をかけて咲匂ふ籬の菊はかひなくてその下露もいたつらに淵なすはかりたれしかもをしむ袂をふり捨て空蟬の世のうつつとも夢ともいかてしら雲の天飛雁のかりの世を涼しき池の蓮葉や花の臺にのりの道今ハひたすらはるかにも栄行松の十かへりの緑の久しき萬代をやすかれとのみことにはにもる甲斐有しより実にすくよかにます君を天かけりつついやまもりませ

反歌

めぐりこし秋の千草の数々に思そわたる夢の浮橋

今は只天かけりつつくれ竹の千代の行末いやまもりませ

折しも雁の鳴わたりければ

かりくときくさえうしと旧年の秋かこちし鳥は又も来にけり

紅葉に□の伊達する心かな

△岡部丈衛門▽

名残ある秋にも尽ぬ涙かな

享和二年九月卅日、岡部丈衛門死悼句とあって記録されているものである。岡部氏については他に記事がみられずその人物像は明きらかでない。

△三井氏▽

文化元年十二月廿四日、「日録」には次のような記事がある。

三井の主五つつの御年いささか物教へ参らせし事あり、其後遠き若狭の国に移り住給ふニより常に行通事も無くうとくしかりしか、四十年余り過て吾妻に下り移折くの交に我師なりなと戯給ひしニ今年十二月十四日俄に身罷り給ふによりかく、

楽しさも憂も語ハみしかくて

別れハなとて長く成ぬる

思ひきや長き命のあなたとりて

先達君の別れ見んとハ

十二月十四日の「三井宇右衛急死」という記事に対応するものである。三井氏については他に、寛政八年十二月十九日「三井介之□二十石御加増江戸引越」、享和元年七月十六日「三井女不幸」、同二年五月廿八日「三井錠之介御次被仰付」といった記事があり、すべてが同族であると必ずしも断定できないが小浜藩士であると思われる。

玄白をめぐる多くの門人・知友のうち追悼の詩篇の残されたもの十六人、十七篇について取りあげてきた。出自や経歴等の明きらかでないものが六名あるが、その他については平賀源内を除いて小浜藩関係者五名（藩医二名を含む）、また官医二名、小浜藩医二名、他藩医一名、町医一名というように所屬は異なるけれども医師六名と類別できる点が特徴的である。なお他の詩篇による資料とあわせて、玄白周辺の人々の全体像をみなければならぬが別稿に譲りたい。

註

(1) 松崎「杉田玄白の『鷓齋日録』について」(『史学』49—1

所収)、「杉田玄白の『鷓齋日録』に記された一落書について」

(『慶応義塾志木高等学校研究紀要』第九輯所収)

(2) 大鳥「『鷓齋遺稿』について」(『日本医史学雑誌』17

—2、3、4、18—2、4、19—1所収)

(3) 「杉田玄白の家系」(『日本医史学雑誌』8—1・4合併号

—杉田玄白一四〇年忌特集—所収)、緒方富雄「杉田玄白の女

「八百」」(『日本医史学雑誌』13—4所収)、片桐一男「杉田玄白」

第一章、第五章・六

(4) 有阪其馨(東溪)と同一人であるか否かは不明であるが、

「日録」の天明七年二月から三月にかけて次のような記事がみられる。

二月九日、昨夜盗賊入金子三百七十五両脇差腰盗れしよし

東溪より知せ来右に付談合参夜帰

二月十日、昨夜東溪一件に付早朝吉田忠蔵□□夫ノ東溪へ参

帰

三月四日 東溪へ参談

三月十一日 今日東溪御暇被下差控伺候所不及談被仰付

三月十九日 東溪□□□□済

また天明八年六月十四日には「東溪方男子出生」とある。

(5) 片桐一男「杉田玄白」一六三—一七〇ページ、鶴田勢湖

「若狭医官杉田甫仙、杉田玄白先生旧墓域(廢滅)の墓碑文」

(『掃苔』6—11所収)

(6) 鶴田、前掲論文

(7) 片桐、前掲書一〇ページ

(8) 岩波文庫「蘭学事始」所収

(9) 片桐、前掲書一三ページ

(10) 原田謙太郎「杉田玄白の『鷓齋日録』」(中央公論51—8、

所収)に、「伯元と婦人落ちければ」と読んでいる。原本写真複製版によれば文字そのものはそのように読むことも可能であるが、いささか不自然である。

(11) 片桐、前掲書

(12) 日本思想大系64「洋学・上」二二四—二二五ページ

(13) 「おさる」—天明七年二月廿六日おさる来、同月廿八日お

さる帰、同年四月廿三日おさる来宿、同年十一月廿九日おさる

来、同年十二月二日おさる帰、天明八年正月廿日おさる山崎母

十蔵宿、同年五月廿五日おさる帰、寛政元年四月四日おさる不快

に付本郷一宿、同月七日おさる不快本郷一宿、同二年二月二日
さる見廻に参る、「おかな」―天明七年四月二日おかな来、同
年八月廿一日おかな来、同年十一月廿八日おかな来、同年十二
月二日おかな帰、天明八年正月十五日おかな宿、同年三月廿九
日おかな来、寛政元年正月八日おかな南産男子出生
「お芳」―天明七年四月九日お芳来、寛政十年四月八日お芳高
崎発足

「おかよ」―寛政元年九月十九日おかよ帰、同年十一月廿六日
おかよ殿帰、寛政十一年六月廿日おかよ殿不幸

「おかふ」―寛政十年四月三日おかふ死今日より忌中引

(14) 「近世人名録集成」第三卷、四七九ページ

(15) 高浜二郎「杉田玄白の手記『鷗齋日録』」〔歴史地理〕86―
3所収)

(16) 大鳥蘭三郎「鷗齋遺稿について」〔日本医史学雑誌〕17
―2所収)

(17) 松木明知「桐山哲と『解体新書』」〔日本歴史〕197所収)

(18) 森銑三「村尾元融伝の研究」〔森銑三著作集〕第七卷、二
六一ページ

(19) 松木、前掲論文

(20) 「洋学・上」〔日本思想大系64、二七四ページ〕

(21) 「事実文編」四十二

(22) 「統徳川実紀」〔国史大系本、三八〇ページ〕

(23) 「近世人名録集」第四卷、二九六ページ

(24) 高浜二郎「和歌の玄白」〔鍍金〕225所収)

杉田玄白をめぐる人々

(25) 森銑三「柴野栗山」〔森銑三著作集〕第八卷、三三〇ペー
ジ)

(26) 森銑三「谷文晁伝の研究」〔森銑三著作集〕第三卷、一九
六ページ)

(27) 注(26)

(28) 和田信二郎「中川淳庵先生」二五ページ

(29) 角川書店版「図説俳句大歳時記・夏」

(30) 高浜二郎「和歌の玄白」

(31) 岡本隆一「杉田玄白翁のお正月」〔日本医事新報〕801